



門 3
號 6665
卷 2

烏帽唐制有紗
帽之制是也邦
名鈔烏帽兼名
花云帽一名頭
衣注烏帽子俗
訛烏為焉今按
其著用之始不
分明蓋嵯峨朝
廷弘仁九年有
男女衣服皆依
唐法之制始于
此時乎天武朝
廷有漆紗冠之
制充之者非也
是正今冠盤觸
也乎

男官裝束要領鈔下

狩衣之具

烏帽子

按家清花并中院三條正親町三條西小乃家
おは立烏帽子着用有りまお狩林家名家
諸右史家より多分十六歳まで立念ほし
まは折烏帽子と名しう鷹狩或蹴鞠
馬上乃耐いつまも風折のう「裝束抄」或抄の取
かくのう「額」又額の折やう或龍眉右眉

裝束要領抄下

早稲田 大學 図書館
昭 31.9.28 受
藏 書

あふひの諸眉。小諸眉。片眉のふりり大抵
上皇ハ左眉持家ヲ徳眉諸家ナシホ家ハ
小法眉ハ後右眉ナリ地ナハ片眉をもち
但家これ故実ありて志わて定るるなり
ひりハ志ほりりの名もあつくりり
今世へえて主差別なり

懸緒 付組然

衣冠の部小志ありぬ
布衣カキ或用狩衣字或又又
用襦衣襦衣字

布和名鈔布
衣此問云襦衣
和訓加利收

或問襦衣始干
何御宇哉答未
見國史若弘仁
以來用之乎據
野行幸記

宿老袖結事園
大曆延文四年
正月廿五日公
賢公遣經頭卿
返事曰抑狩衣
結事組分紺綵
之外宿老之躰
不兼及候但就
狩衣色白組分
毛用事哉久

冬ハ裏あり狩衣云之夏ハ裏なし此狩衣ナリ
組紗のりり延喜夏ハ同季通用して用ひらる又
右記乃所見凡五位以上ハ織物六位以下延喜文
定り制なり然といとも今世六位の人も皆
織物乃狩衣を用るものハ非なり文色は志わて
定るるに乃平の時ハ紅梅萌黄の浮文盛年
を堅文あり浮文ハ繁く堅文ハまろく文をとも
袖括ハ十又未滿毛抜形着る人ハ薄年乃組
萌黄紅は志等の打交濃紫の旁次ハ

桃華藥葉狩衣
大納言と着用
すなり

薄衣、其のうすき次、清黄乃組なり裏表のふ
か好、はか名にり狩衣、表裏を色各別なり
又紗のうらさぬ、踏とむりかへして前後の
すそ、いの、次袖結を白糸とよりて、右より
ねま二筋おろく、ととん、但夏を通用乃
事古記、いなり、いへ通用の狩衣とは
紗のかりさぬ、小裏付とると月ひふなり凡
狩衣、大納言以下着用の、なり武家よおの
て、法大吏着用乃と也、公武御制各別極よ

或問、有名狩衣
以其表裏色織
用單狩衣之時
其經緯如何答
以裏絲為經、以
表絲為緯、于是
從、緯覆、經之、理
也、以松重、與藤
重知之、猶可尋
挑文師

乃、くり、名にり、狩衣、のり、梅
院、右大臣忠定公
說正月十五日迄、若人着用之由也、一條、禪關兼良公御
說自十一月至二月、今按号白菊、九十月用之、互色相通、柳、表白裏青
若、人浮織物、壯年以後、人表練貫忠定公說自正月、至四月、祭百、櫻、忠定
著之、兼良公御說自冬至春、今按四五月号卯花、用之、亦色相通、櫻、公說
表白裏二藍兼良公御說表白裏赤花、又裏蒲萄、春用之、櫻、三條家說
三條家說表裏白或裏紫号白梅、有之、此事、欽、櫻、三條家說
表萌木裏紫、春用之、中年以後、不用此色、若年、人用之、三條家說
忠定公說裏二藍兼良公御說裏赤花、各表色、一同、樺、三條家說
表薄蕙、芳裏濃蕙、若年、人用之、中年以後、不用之、花、三條家說
忠定公說表薄色裏二藍兼良公御說表薄芳裏赤花、家說
表黄朽葉、織物、タテ、裏紅、人不用之、忠定公說表、タテ、裏黄、三條家說
裏黄、春用之、兼良公御說表薄朽葉裏黄、只山吹、トモ号之、裏、三條家說
三條家說表黄朽葉裏青、忠定公說表黄、藤、忠定公說表、タテ、裏青、裏萌
裏萌黄、若年、人春用之、兼良公御說表黄裏紅、黄、自春、至四月、兼良公御
說表薄紫裏、卯花、四五月、色同、柳、若鷄冠木、忠定公說表裏共薄青
青、三四月、色同、柳、若鷄冠木、四月、著之、諸抄、有名、無

色カキツタ 忠定公說表二藍東萌木四五月著
目 **杜若** 或書表萌木裏薄紅梅有之如何
盧橘 忠定公說表タテ黄

柳說表朽葉 **菖蒲** 忠定公說表青裏
重青五月 濃紅梅四五著之 **棟** 忠定公說表薄色裏青
忠定公說表タテ黄 **瞿麥** 忠定公說表薄籜芳裏青兼良公

重青自六月至九月 柳說表紅梅裏青四五月著之 **桔梗** 忠定
表二藍裏青 **萩** 同說表薄紫裏青自六月至八月
五六月著之 九月兼良公御說表籜芳裏青 **紫苑** 忠定公說

青自六月至九月諸說同 **黃紅葉** 同說表黃裏籜芳
自九月至五節著之 **青紅葉** 同說表萌木
至五節兼良公御 **白菊** 九月 忠定公說表黃裏

說表青裏朽葉 色同梅 **黃菊** 忠定公說表黃裏
同說表籜芳裏青 **移菊** 忠定公說表薄紫裏青兼良公
自九月至五節 御說表中紫裏青自十月至五節 **松重**

三條家說表萌木裏紫忠定公說表青裏赤花四季
通用年少人至十五歲著之兼良公御說表青裏紫 **海松色** 忠定
表色青黑而如海松裏白八宿老 凡此等の文と著用入

人著之兼良公御說表萌木裏青

時各々れくの文と用り事通法乃り

より此外枯色カレイロ 又号黄青忠定公說表黄青自十月至翌年三月兼良公御說号枯色表白裏薄色

青 忠定公說表裏同中年以後用 **二藍** 表裏同色 **薄色** 忠定公說

者不謂夏必 **朽葉** 忠定公說表タテ黄裏黄令按 **檜皮** 三條家

可用生裏也 同或裏花田忠定公說表紫裏同老人ハ用 **香** 三條家說四季通用十

人ハコカレ香ト号シテ下カキヲ薄紅ニシテ黄ヲニセテ赤之所詮

濃香也織物ニテ著スル時ハ經緯トモニ濃香ニ染テ織之裏紅老人ハ

經香緯白糸仍文白ナリ浮織物浮線綾長年ノ **花田** 表裏同老人

人不用之唐綾并薄物練薄物用也老者白裏 **赤色** 三條家說若年壯年人等用之四季通用忠定公說

忠定公說タテ黒青又キ黄或說 **裏濃** 籜芳 三條家說表薄籜

タテ黄又キ黒青云是定說云

表赤裏二藍年少人著之兼良公御說表タテ赤

表裏同老人

表裏同老人

表裏同老人

用 白色

三條家説若年人ハ浮織物浮線綾練薄物等也中年以後唐綾和綾頭文紗ノ薄物用之練緯用之裏若年張

裏中年以後生^レけ等の教其文不定各表裏又目乃事

家^ノく終^ル意巧區^クわ^テ一^ノ概^ノの^レは

從古記の不見色目^ニあ^リく^レら^リと^シた^レ略^ス

又白裏乃^ハかり^ニあ^リい^ハは^シ雖^モ衰^レ老^ル人^ノ悼^ル

躬^ニ職^スあ^リぬ^レ人^ハ月^ハひ^ク死^スや^リに^ハく^レる^事也

と^シ近^ク世^ノ壯^年の^人も^官に^シり^テ着^用し^給ふ

先^ニ又^ハ布^ノの^りも^ぬハ^シ上^ニ皇^極熱^ノ比^著淨^潔下

も^もつ^レ依^テ又^ハ依^テ河^ニ毛^利れ^リか^リる^事也

と^シる^人の^着用^スる^事一^ニ死^ス一^ニ或^レ記^スる^事也

腰帶^{コシオビ}或^ハ云^ハ莞^腰

狩^ノ衣^ノ久^シに^活く^事切^ト用^セ也^但白^裏の^狩衣

若^ク用^ル乃^ハ人^ハ白^帯と^用ら^ル恒^例乃^ハ一^ニなり

衣^單并^大帷

晴^ハの^時ハ^衣并^草帯^と若^ク一^ニ帯^ハ大^帷白^用之

若^ク衣^乃衣^と直^衣何^レハ^衣冠^乃時^ハあ^リ

但^シ五^月九^月壯^年の^人生^衣裏^表生^檢重^と用^セ也

檢重^夫本^集
夏^衣光^俊朝^臣
世^とや^す民^乃
こ^つひ^かつ^り
足^てむ^のか^らね
ハ^き入^もシ

皆交りて月ひらるる多分女郎花蘂芳ふ也
老人大将装束抄餅等の白衣或抄り又草紅帷白衣冠
乃何し同しを代夏ハ多く単に帷計月ひらる
袖單に著用乃し也又尋常ハ草帷と
略して月らさるよりなり

指貫

色目衣冠の部小くり

下袴付腰次

衣冠の部し志おし也

少刀チサカタ

武家小かわり供奉乃内狩衣着用しり
路途の間或鞘巻或帯れ刀に少刀を月ひら
也殿中出仕しハ少刀の月ひたまふ
承さ怪し西見し公家ハかりさぬ也
是と月ひ治しは但從者ハ太刀とりしり
又晴シの御幸乃内侍府ユフの人帯先例何り

蝙蝠

衣冠の部志新ぬ

狩衣帯劔例保
延五年二月十
日兩院雪見御
幸衛府之人皆
帯劔見餅抄頭
書

親實 實長 實長 實長

淺沓 并緒太

衣冠乃社み志引也

一枳家。清花并。中院。三條正親町。三條西等の家
羽林家名家の勝劣差別いづみ哉

枳家とは。近衛。九條。二條。一條。鷹司。五家
なり藤原良房公忠仁公 是也人臣攝政の盪觴
しる里同基經公昭宣公 是也是開白乃寂初り

鑰匙公世
左大臣正三位
冬嗣
權中納言長位
長良
攝政大臣從位
准三位
良房
攝政關白政大臣
基經 從二位
實長 從三位

清花 如字華族
通稱也。北史
袁翻傳以名家
子歷任清華

鑰匙公世
從三位
師輔 公季

權大納言長位
公實

大政大臣從位
實行 三條祖

權中納言正三位
通季 西園寺祖

大臣大將從位
實能 德大寺祖

まゝよりいふ枳政開白にまゝなるまを
先途よりいふ也。大信の大將兼任しるを
いふ枳政開白おつてハ親撰しる也。故
号具平親勇 從三位 袁長位 袁長位 袁長位枳家由也。師房 頭房 雅實 久我祖
清花也。久我三條轉法輪西園寺德大寺花山院
大炊御門今出川又号菊亭 等等の敷也。近世廣幡醍醐 等之家此一列皇子
皇孫といふ親王乃 宣下なく源姓を賜て
大臣の大將よのやり或ハ枳家の清良といへ
とも枳政開白乃先途もかく大信れ大信

上三三三頁少

久我相國惟實公世
内大臣正三位
通親

本政大臣位
通光 久我正統

大納言三位
通方 今中院祖

實行公孫
左大臣正位
實房

大政大臣位
公房 三條正統

權大納言三位
公氏 三條親祖

公氏卿六世
内大臣從二位
實繼

良倉正位
公豊 三條親祖

權納言從位
公時 三條西祖

乃こいのほりまふ家く也英雄の家なれハ
稱美のりて清花とP以又公達家也と
花族ともP也
中院。三條正親町。三條西此三家ハ次子昇進
志ふひく大臣に任し給ふとて大將
兼任しふるハ故に俗号大臣家此分
法家とて邂逅ハ大臣拜任乃例の如く
何りこいとも通例にあつれと大臣家と
稱せざるなり

(名家漢司馬遷)
傳名家師古注
名家者流出於
禮官

羽林家とは侍從より左右近衛中少將と經歷
して次子昇進し給ふ家くと羽林家とP以
を清府の唐名と羽林とP也蓋羽林家ハ
中にを勝方何りて或以大中納言為先途或
以系議散三位先途よりふる家く有之就中
中御門^{号松木下}是也 四^下中山等の家ハ是羽林家の
実より又河原水無瀬兩流を昇進羽林家
なり
名家とは儒門といふ其中左右辨官^{有三大}
中少

藏人と經歷して次第昇進する者も有り
諸大夫家も亦辨官を爲人を経て昇進乃
家もありと云々流儀は各別なり

一立烏帽子と風折と各別は小町の謡
一烏帽子と風折と各別は小町の謡
一烏帽子と風折と各別は小町の謡
かついことり幸いといや

續世継云ひいえやういふくゆか
半もあつりけるなえいけはうきさむ
えはういふくゆかえやういふくゆか

引立烏帽子保
元物語條殿御
事義朝御前ニ
召ル赤地錦直
垂折烏帽子引
立ワイタテ註
太刀ハイタリ

かゝりてゆめまきと云々又お尋ねは
引立えやういふくゆかえやういふくゆか
ゆかえやういふくゆかえやういふくゆか
ゆかえやういふくゆかえやういふくゆか
ゆかえやういふくゆかえやういふくゆか

一布衣とまで和訓よりさぬとよき事なり今世
官位有る人の着用はかりさぬといひ書侍の著
しは布衣といふやうに承は各差別有るは
是は假令上下をわらうと云々と覚作

百練抄保元三年三月近日常人五位等連署訴申有文狩衣停止由仍被許

狩衣といひては布衣といひては裁縫
いさかよりよりさくい 院中み事
布衣始とP事有るは 御讓位の位
上皇よりゆく御狩衣著御乃初式とPい
志く六時より布衣といひてもかりさぬ
といひてはさきより次は又青侍乃
着しは六太祥雲文とていとも希有は文
色おだいのよりへ五位の人も地下は文
の定さへりりし世も也況青侍とや然る

魚うらうらうし取らぬ

一狩衣と著しいて糸内出仕は事といふ

堂上方衣冠連衣より下の服と著し糸

内出仕の事よりさきい但清幸之時供奉之

堂上方狩衣着用しよりといふと出仕は儀

さきい又諸家乃侍雑色布衣と著し主人

み相従ひ糸入するより庭上までの候中く

子細なり但不入日見禁秘御鈔華月華等門之由を制あり

一頭職といはる

中右記寛治八年閏三月八日近曾有新制布衣烏帽子者不可入陣中

さしつらき目くらた官と頭職も殿官
まじりぬなり

直垂之具

烏帽子

大概風折の

懸緒 并組紐

前のお形

直垂 并 布直垂

堂上ハ練精好等乃直垂なり武家方侍從以上

色かくれぬ此のうき也色大概黒紅黄を

木蘭地といふ多由なり其外色くはり

直垂武士服之
由見或祓記蓋
其盪筋不分明
可考

木蘭地僧尼令
義解謂木蘭黃
様也

支那要領抄

紫崩黃紅等直
垂於武門御制
服之由以是雖
狩衣憚此三色
之由也蓋近世
紅之外多被用
之云

蘇東要領

但紫崩黃紅等ハ 將軍家清代、清着用乃
色を好む憚之云然其陽明の清家ハ精好の
紅乃直垂は着用の云かり又布直垂は武家
五位法衣杖取清母の諸大夫或ハ地下の清司
官人事に云り着用を好みて直垂ハ藝乃時
乃事也布直垂俗小足と大紋といふ大かり
紋付云りや素襖袴との習りぬ胸紐
打組と華緒との遠かり

同下

下ハ総のり紀長縮あり色と下れあり但
腰紐ハ白練あり縮直垂布直垂といふ裁縫等
事なりむいハ先大口と云り次ハひらと
むえれかきにて着る云々毎に直垂は下
と着る云々伊勢下総入道 宗五 書ハ丸と云
り

少刀

堂上ハ直垂に少刀の事あり但陽明の清家
ハ代ハ清例として少刀と云ひ多ふ云子細

蘇東要領少刀

一陽明の清家といひつまの清家とすは武又
揚名れ女おとす事も同し事いや
近侍殿乃清家とすはひり大内裏の時
を米殿清家陽明門の前よりとりたる
陽明の清家とすはひり清なる
くりき事いふは又揚名の女おとす
事は別儀中しく秘傳家にかゝる事
一陽明乃清家計より少刀被用いり子細有定
ひり尊氏將軍に代り清在京乃間

蝙蝠

花小お

浅履 并緒太

おに同し

或曰萬松院殿
義晴御時惠雲
公種家被進
院殿公種家被進
紅直每少刀之
例也云

辨別要領

近湯殿(紅)直每少刀被進ひひりり汚例
 として用ひ給ふりりなりあふら子細
 なり事よせい

一藪とひい

藪とは急考晴よとら次又平生乃事
 めとらつら中なる事よせい晴藪尋常
 と三つよ愛りりりりりり

一白太刀黒太刀とり事ひい

白太刀といはれはくら銀乃打敷めて目貫

おく或ハ家の文とほき帯執葛蒲華を
 表向袴義に用へさうりかり黒太刀と
 鞠ゆるか〜はふ藪とけく思くわら
 かおと志やくどうよとけりあはらあこ
 くら〜目貫我家の紋と焼付け〜帯執
 葛蒲皮柄もまらばうでぬれ〜ぞと黒
 太刀といふ〜伊勢下紙入乃志執〜
 され書みん〜

辨別要領

一日

召具裝束

褐衣 布衣
白張

武官乃五位、殿上人、行幸の前駐或ハ節會の
警固の日ハ、關、腋、袍と着

行幸之時、帶弓、箭、卷、杖、
サリ、節會之時、立、安、垂

也、纓 綾オシロイ、隨身オシロイと召具オシロイ、ハ隨身裝束ハ

冠カサ、細、綏 褐衣カサ、右、近衛方或熊丸或鴛鴦丸等也、袴ハシ、左、近衛方或藤方或二藍右近衛方或朽葉或崩木等也、帶弓、箭壺、胡、錄、帶、劔サ、セ、ハ、ヒ、ク

右、中將の隨身ハ、左右、少將乃隨身二人、左右、衛、佐の
隨身二人、是定例なり、外、是等之儀ハ、隨身
ハ、布衣乃、侍、白張の雜人召具ハ、ハ、ナ、リ

上卷頁少

隨身器具一冷火付は布衣白法具一たきふ
事勿論なり

衣文雜色可覚悟條々

- 一御主人御装束法者用乃事一ゆゑに五三日已前
皆具損失之有無可改之事
- 一御懸緒別外用之——并法位袍亦同——又乃系
且又針とさみ等可用意事
- 一御装束法者用又ハ御脱之時御主人と不向北極
可知方角事
- 一御冠并御装束不向北方不涉跡方事
- 一武家之法方束帶兼冠法者用之時かかひ袖と

ごらてまじりては家めくも所可作多き
御人此公得あまきかり

五位五位装束之具并同言之類
家従靈井 義知
書志新く添削とありぬ尤有無もの也
誠り此色に染るる人乃染内と道は多
少をわかん

元禄十二年三月十日
堂は三の位藤原朝臣御判

上野原御鑑

常聞冠と服のたうりハ神乃代より名ありて人の
 代より漸其位乃あふかり御して君臣上下
 其卑の序とていさうしむ是禮の成なり他乃
 國めとていさうしめ鳥獸の冠角ありと人亦冠綏と
 はらり麻絲をかき久く布帛とてはる小衣裳は
 つるなり後世ふつりて貴服賤服各等差となり
 束體して朝しつる人の束體衣冠とてこれハ
 うやまひれりこれとて其人よりつりて華服と

礼部要領

着於附の是とある事、和漢の如く何れもよく
ま程くとりてさす人志は、らんや予らや、くもけ
故美と云の、盡先生の柗下に、はつと、昨々述作され
同位又位、装束略抄と、ひまひ、はく、彼元と、さる、不事
に、婦く、より、ま、は、く、く、ため、ふ、日、来、講、習、ち、り、み、と
自己、く、す、く、く、た、動物、と、ひ、鼈、頭、傍、註、よ、く、く、後、よ、女、房
装束、乃、事、と、附、く、く、或、專家、より、装束、要領、鈔、と
題、名、と、給、う、ぬ、是、より、先、よ、一、名、の、り、や、り、く、く、も、の、ら

るく、損益、する、所、と、ある、は、書名、も、亦、つ、く、た、ま、り、然、予
志、く、く、く、く、ふ、所、あ、つ、て、止、事、と、得、れ、ハ、師、に、再、三、祈、ひ
ゆ、く、人、乃、く、く、ま、と、く、く、く、く、又、と、恐、く、今、刊、版、く、く
徒、お、す、心、の、機、臆、と、つ、く、く、く、く、也

正徳六丙申歲正月上澣 徳田良方

寬保二年 壬戌仲秋吉旦

堀川通高过上町

鉄屋七郎齋

求板

皇都書肆

寺町通松原下町

梅村三郎齋

